

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-06-01

ニューヨークとパリ

鈴木, 晶

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 / 異文化

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

45

(終了ページ / End Page)

51

(発行年 / Year)

2011-04-01

essay

ニューヨークとパリ

鈴木 晶

2009年度に1年間の在外研究を許され、前半はニューヨークに、後半はパリに滞在した。

在外研究員は現地の大学に客員研究員として所属するのがふつうで、私も前回の在外研究（1994-95）の際にはロンドン大学（UCL）とサリー大学に所属したが、今回は大学の研究施設を使わせてもらう必要性がなく、もっぱら図書館で研究調査をしようと思っていたので、あえて大学には所属しなかった。

*

ニューヨークでの研究拠点は、ニューヨーク公共図書館（New York Public Library）の分館である舞台芸術図書館（Library for Performing Arts）。入口にライオンの彫刻のあるニューヨーク公共図書館は42丁目にあるが、舞台芸術図書館はリンカーンセンターにある。ちなみにニューヨーク「市立」図書館と訳されることもあるが、それは誤りで、市立ではなく、NPO法人である。

舞台芸術図書館は主に音楽、演劇、舞踊の3部門からなる。私が拠点としたのは舞踊部門で、『ウェストサイド・ストーリー』などで有名な振付家ジェローム・ロビンズにちなんで、これは Jerome

Robbins Dance Division と呼ばれている。この舞台芸術図書館のあるリンカーンセンターは、マンハッタンのど真ん中にある、10以上の施設からなる巨大な複合施設で、中心にあるのがメトロポリタン・オペラハウス（アメリカン・バレエ・シアターの本拠でもある）、向かって右がエイヴァリー・フィッシャー・ホール（ニューヨー・フィルの本拠）、左がデイヴィッド・H・コック劇場（旧ニューヨークステイツ劇場。ニューヨーク・シティ・バレエの本拠）。エイヴァリー・フィッシャー・ホールのさらに右に道を挟んでアリス・タリー・ホール。その後ろがジュリアード音楽院とスクール・オブ・アメリカン・バレエ。デイヴィッド・H・コック劇場の左には道を挟んでフォーダム大学。少し離れたコロンバス・サークルに面したタイムズ＝ワーナー・ビルの中にあるローズ・ホールもジャズ・クラブもリンカーンセンターの一部である。このようにリンカーンセンターは、ブロードウェイと並び、ニューヨークの舞台芸術の中心地なのである。

半年の滞在中、仕事と用事で日本に2回、ハンブルクに1回、ジャマイカに1回旅したが、アメリカ国内はまったく旅行せず、学会でボストンとハートフォードに出かけただけで、あとはずっとニューヨークにいた。

昼は上記の舞台芸術図書館で資料を探し、夜はデイヴィッド・H・コック劇場かメトロポリタン・オペラハウスにバレエとオペラを観に行く、というのが毎日の基本パターンだった。つまり昼も夜もリンカーンセンターにいた。そのため、すぐ近くのアパートに住んだ。どれくらい近くかというと、バレエが終わって、5分後にはもう部屋に戻っていた。リンカーンセンターからは2ブロック、67丁目と68丁目の間である。住所は「ブロードウェイ」で、実際、ブロードウェイに面していた（そのために車の音がうるさかった）。ブロードウェイというと芝居やミュージカルの本場というイメージがあるが、それは

42丁目あたりのことをいうので、ブロードウェイというのはその名の通り、マンハッタン島を斜めに縦断する長い道路である。先住民時代からあった道だ。日本では鎌倉に住まいがあり、通勤に2時間かかるので、在外研究期間中くらいは都心に住みたいという思いもあった。

アパートの斜め前にバーンズ・アンド・ノーブル書店があり、ここは夜12時まで開いていた。日本のジュンク堂がお手本にしたのがこのバーンズ・アンド・ノーブルだと思うが、学生が床に本を並べてノートをとっている姿はいつも見かけた。また店内にスターバックスがあり、客は売り場から新聞や雑誌を（買わずに）持ち込んで、コーヒーを飲みながら読み、読み終わるとくしゃくしゃのまま置いて、帰っていく。

*

ここでは研究の詳しい内容には触れず、思い出すままに、海外生活ガイド的なことを書いてみようと思う。SAを控えた学生諸君の参考になれば幸いである。

ニューヨークは危険な街というイメージを抱いている人も多いようだ。実際、かつては本当に危ない都市だった。20年ほど前、ハーレムにジャズを聞きに行くツアーに参加したときには、拳銃を持ったガードマンが同行した。

現在は、世界一安全な街である。夜中でも若い女性がひとりで歩いている。もちろん、どんなに安全な街であろうと、危ない場所があったくないわけではないので、ちゃんと嗅覚を働かせる必要はある。それは東京でも同じことだが。

さて、観光でニューヨークを訪れたなら、かならず美術館に行くであろう。メトロポリタン美術館や近代美術館（MOMA）ももちろん素晴らしいが、グッゲンハイムやホイットニーにいくと、アメリカ文

化のある一面がわかって面白い。

衣について。ニューヨーカーの服装は概してラフである。とくにアップパーウエストサイドは、誰も会社に勤めていないんじゃないだろうかと思うくらい、カジュアルな服装をしている。ファッションの店もたくさんあるが、いまや値段は日本のほうがずっと安い。夏には、若い女性の多くがビーサンを履いて、ぺたぺたと歩いていた。

食について。私は外食があまり好きでないので、食事は原則的に自分でつくるのだが、海外に出るとかならず感じるのは、野菜がおいしいということだ。日本の野菜はどうしてこんなにまずいのだろうか。ブロードウェイと72丁目の角に「フェアウェイ」という大きなスーパーがあり、ここの野菜は安くておいしかった。ただ、ドンキみたいな通路が狭くて、いつでもごった返して、「悪夢だ。気が狂いそうだ」と騒いでいる老婦人を見かけることもしばしばである。少し北に行くと、映画によく出てくる、有名なスーパー「ゼイバーズ」があるし、少し南のコロンバス・サークルにはオーガニックフードで知られる「ホウル・フーズ」がある。ニューヨークでは、小売店というのはほとんどなく、買い物はスーパーです。後に述べるように、パリとは対照的である。スシはすでにアメリカの食文化の一部になっていて、どこのスーパーでも売っている。日本のものであることを知らない人すらいる。ニューヨークの食べ物屋でいちばん流行していたのは、ラーメン屋と居酒屋である。エダマメは誰もが知っている。

住について。アパートについては先に述べたが、マンハッタンは狭いため、家賃はものすごく高い。ブルックリンもいいところはかなり高い。生活習慣についていうと、アメリカ人はシャワーはよく浴びるが、風呂にはほとんど入らないようである。

「ニューヨークはアメリカではない」とは、よく言われることだが、実際、さまざまな肌の色をした人びとが共存している街だ。だから街

を歩いているだけでも、日本人だからといって誰かが振り向いたりすることは絶対にない。その意味ではひじょうに住みやすい。

*

後半はパリで過ごした。パリでの研究拠点はパリ・オペラ座図書館。これはフランス国立図書館の一部である。いちばんメインのフランソワ・ミッテラン館、リシュリユ館にも頻繁に行った。

ほとんど毎日、朝から晩までオペラ座図書館にこもっていた。これはオペラ座（ガルニエ宮）の中にある。コピーした文献は段ボール2箱以上になった。コピー代が高いのが頭痛のタネだった（1枚50円する）。ちなみにコピー機はニューヨークでもパリでもすべて日本製である。著作権保護の関係から、コピーできない文献も多く、研究者たちはノートパソコンを持ち込んで、せっせと写している。日本ではマックはきわめて少数派だが、パリではマックのほうが優勢である。これはニューヨークでも同じだった。

一歩外に出ると、さすが世界一美しい街である。どこを散歩しても楽しい。街全体が文化遺産なのである。パリの中心部は千代田区と港区を合わせたくらいで、とても狭い。

住まいは5区の、植物園の近くで、目の前にあったのは、精神分析の創始者ジクムント・フロイトが若い頃に留学したサルペトリエール病院だった。

パリにもスーパーはあるが、たいていはマルシェ（市場）で買い物をする。マルシェは毎日開かれているところもあるが（常設マルシェ）、たいていは週に2、3回開かれる。前の晩に市の職員がきてテントを組み立て、次の日は早朝から店が開く。夕方になると、また市の職員がきて掃除をし、テントを撤去する。マルシェはスーパーとちがって、対面販売である。スーパーの場合は自分で勝手にバスケットに商品を入れて、レジで払う。いっさい外国語を話さなくても買い物

ができるわけだが、マルシェだとそうはいかない。とはいえ、手ぶり身ぶりで買い物をしている外国人も多い。

ニューヨークにはおいしいレストランがたくさんあって、食いしん坊の私はたいへん満足していたのだが、パリにいったら、「ニューヨークの食べ物って、あれはいったい何だったんだろう」と思ったくらい、格段においしい。大人と子どもくらいの差がある。

レストランで気づいた最大の違いは、アメリカでは食べ物を残すのはふつうのことで、一口だけ食べてあとを残しても、ウェイターは何も聞かずに片付ける。パリでは、食べ物を残す人はいない。すべて「完食」するのである。アメリカでは「ドギーバッグをくれ」といえば、ウェイターがすぐにもってくる。ドギーバッグとは犬の餌用の袋という意味だが、それは「方便」であって、家で自分が食べる場合でもいちおう「犬の餌に」というのである。フランス人は（たとえ老人でも）いっさい残さないから、ドギーバッグなどというものもない。残すと、かならずウェイターが「何か問題があったのか」と聞いてくる。

ニューヨークには「エコ」とか「省エネ」という言葉は存在しないらしく、夏はどこでもぎんぎんに冷房がきいていて、冬はがんがん暖房がきいているが、パリでは、ほとんどの家には冷房がないし、冬も寒い。レストランですら寒い。これは省エネのためというより、もともとフランス人は節約家、はやい話がケチなのである。が、考えてみたら、ケチとはつまり省エネということである。

パリでは老人たち、とくにおばあさんたちの元気がいい。バスでほんやり座っていると、「どきなさい」といって追い払われる。たいてい、おばあさんたちは怖い顔をしていて、「不幸な生活をしているんだろうか」と考えてしまうほどである。

話は変わるが、フランス人はコード、つまりコード番号が好きで、

クレジットカードで支払う場合も、ニューヨークだとサインのほうが多いのだが、パリでは暗証番号を入力する。アパートやホテルの入口なども番号を押して開ける。なんでも「コード」なのである。

ニューヨークは、昔に比べて書店が激減したが、これはパリも同じで、書店はかなり減り、巨大書店チェーンの「フナック」でも、本の売り場よりもCDやDVDの売り場のほうがはるかに広い。

とりとめのない文章だが、少しでも学生諸君の参考になれば幸いである。